

福岡県における小児・AYAがんの概要

○中島淳一、枇杷美紀、高橋浩司、香月 進（福岡県保健環境研究所）  
横田 峻（福岡県保健医療介護部がん感染症疫病対策課）

【目的】

がんは国民の死因順位第一位である。年齢階級別にみた場合、0歳から14歳までのこどものがん（以下、小児がん）、15歳から39歳までの思春期・若年成人（Adolescent and Young Adult: AYA）のがん（以下、AYAがん）もまた、不慮の事故や自殺とならぬ死因の上位を占めている<sup>1)</sup>。しかし、これらの世代に発症するがんは成人とは異なり、白血病や肉腫などの稀ながんも多い<sup>2)</sup>。2018年には、国立がん研究センターにより、これらの世代のがんに関する統計が公表され、国内の若年者のがんの状況が明らかになりつつある<sup>3)</sup>。小児がんについて福岡県では、国の「がん対策推進基本計画」に基づき、九州大学病院が「小児がん拠点病院」として指定を受けており、県内の「小児がん連携病院」と共に患児の治療や家族への支援を行っている<sup>4)</sup>。今回、県内の小児・AYA世代のがんの内容や受療について把握するため、福岡県地域がん登録情報を基にその概要をまとめた。

【方法】

がん情報は2009年から2015年までの7年分の福岡県地域がん登録情報を用いた。小児がんは国際小児がん分類第3版（International Classification of Childhood Cancer: ICCC3、以下、小児がん分類）の診断群分類、AYAがんはWHO AYAがん分類（AYA Site Recode/WHO 2008 Definition、以下、AYAがん分類）の大分類、国際疾病分類第10版に基づき分類し、罹患数を集計した。また、県内の患者受療動向の観察を、患者住所とがん登録における初診医療機関について二次医療圏を軸としたクロス集計により行った。

【結果】

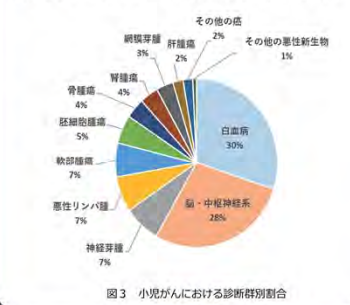
(1) 罹患数および年齢階級別割合

2009-2015年に診断された小児・AYA世代のがんの数は小児がんが678例（良性、良悪不詳の腫瘍を含む）、AYAがんは8,776例（良性、良悪不詳の腫瘍、上皮内癌を含む）であった（表1、図1）。年齢階級別にみると、20歳以上のがんでは、その約8割を女性が占めている（図2）。



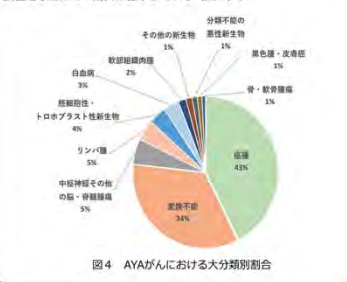
(2) 小児がんの内訳

半数以上を「白血病」、 「脳・中枢神経系の腫瘍」が占めており、「神経芽腫」、「悪性リンパ腫」が続く（図3）。



(3) AYAがんの内訳

「癌腫（浸潤癌）」と「変換不能（上皮内癌）」が4分の3を占めており、「中枢神経系その他の脳、脊髄腫瘍」、「リンパ腫」、「胚細胞性・トロポブラスト性新生物」と続く。小児がんに見られた白血病や脳腫瘍などはその割合が低下している（図4）。



(4) AYAがんにおける「癌腫」、「変換不能」の内容

AYAがんの「癌腫」、「変換不能」症例について、国際疾病分類第10版（ICD-10）による部位に再分類後の年齢階級別割合を示す。いずれも、20代から子宮がんとなんが数の増加し、若年者におけるがんの大半を占めている。主に浸潤癌である「癌腫」では30代後半では乳がんの数が子宮がんを上回る（図5）。上皮内癌が中心である「変換不能」症例は、乳房よりも子宮がんがはるかに多い（図6）。



(5) 受療の概要

がん登録における「初診病院」（がん登録に届出のあった症例のうち、「診断日」が最古の施設）について、患者住所・医療機関所在地間でのクロス集計を、小児がん、AYAがん、40歳以上のがんについて行った。

小児がんでは、九州大学病院および、小児がん連携病院のある、福岡・糸島、久留米、北九州圏域が中心であった（表2左）。AYAがんではこれらに加え、八女・筑後、有明、飯塚、田川など、患者住所と同一圏域での初診が多くみられるようになる（表2中央）。これは、自圏域のがん拠点病院等への受療によるものと考えられ、40歳以上ではこの傾向がさらに拡大している（表2右）。

【小児】	初診医療機関別 - 単位: %									
	福岡県	福岡市	糸島市	久留米市	八女市	筑後市	有明市	飯塚市	田川市	他
福岡県合計	97	100	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
福岡市	226	95.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
糸島市	35	95.3	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
久留米市	18	81.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
八女市	64	85.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
筑後市	5	18.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
有明市	71	5.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
飯塚市	17	9.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
田川市	25	36.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
他	17	11.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
福岡	13	46.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
北九州	126	28.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
他	29	34.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

【結論】

福岡県の2009-15年のがん登録情報によれば、20代以降の罹患数では女性がその約8割を占めていた。小児がん分類別では、半数以上が「白血病」と「脳・中枢神経系腫瘍」であった。AYA世代ではこれらの腫瘍の割合は低下し、20代以降、子宮がんとなんが（女性）が増加していた。この中で、浸潤癌では乳がんが子宮がんよりも、上皮内癌では、子宮がんが乳がんよりも多かった。受療動向では、小児、AYA世代、40歳以上と、年齢が上がるにつれ、「初診病院」が自圏域でのがん拠点病院等への受診に推移していく動向が見られた。小児がんは、成長期に受ける治療による晩期合併症、生殖機能への障害、就学、精神面、患児家族の負担など、医療以外の側面においても、多くの課題がある。AYA世代では、思春期以降のライフステージ変化に伴う、就学、就労の問題等も併せて生じていることから、治療後の長期、広範にわたる対策を推進する必要がある<sup>5)</sup>。がん登録では今後、経年傾向、治療時の受療動向等、県内の状況を明らかにすることで、がん対策の一助としていく予定である。

【参考文献等】

- 厚生労働省 人口動態統計、2) 国立がん研究センター がん情報サービス、「小児・AYA世代のがん罹患」
- 国立がん研究センターがん情報サービス、「小児がんの患者数（がん統計）」、4) 国立成育医療研究センター、「小児がん事業 小児がん拠点病院」
- 別所文雄、「小児がん治療の進歩と課題」、小児保健研究、第68巻 第6号 2009(607-613)

■日本がん登録協議会第31回学術集会 COI開示 筆頭演者名：中島 淳一 当演者発表に関し、開示すべきCOIはありません。